

HIV/AIDSに対する看護学生の知識及び態度の特徴について

— 一般学生との比較を通して

宮本千津子¹⁾ 有藤由理¹⁾ 今泉郷子¹⁾ 宍戸栄子¹⁾
山本奈々代¹⁾ 山本広美¹⁾ 小田嶋芳美²⁾ 澤西美幸²⁾ 坂田直美¹⁾

要 旨

看護学生へのHIV/AIDSケア教育の方法を検討する基礎情報を得るため、89名の看護学生及び30名の看護学以外を専攻する学生の、HIV/AIDSについての知識と態度を調査した。

HIVの感染経路については両群とも正しい知識を有していたが、流行時期を正答した者は看護学生に有為が多かった。感染の原因によって患者を区別する態度は両群ともにみられ、これと保健所等で患者名簿を作成する必要性の認識との関連が示された。また看護学生と流行時期を知っていた者とは友人が感染しても付き合い方を変えないと述べた者が多かった。その他の態度と知識とは関連が示されなかった。以上より、HIV/AIDS及び感染者への態度には、HIV/AIDS問題を多面的に捕らえているか、感染者の個別な事情を認識しているか、及び合理的に思考しているかが関連していると推測され、看護学生に対するHIV/AIDS患者への支援的態度を養うための意図的な教育の必要性が示唆された。

キー・ワード：HIV/AIDS、看護教育、HIV/AIDSケア教育

はじめに

AIDSは増加の一途をたどっている疾患であり^{1, 2)}、看護婦にとってHIV感染者をケアする機会は今後さらに増えると考えられる。HIV/AIDSケアには心・知識・技術に倫理を統合した至上の看護が要求される³⁾といわれ、看護基礎教育の中でHIV/AIDSケアについて教授することの必要性は高い。

HIV/AIDSケアの教育を考える際、性感染症としてのAIDSに対する偏見や差別観の存在に配慮する必要がある。援助をする者にこのような見方があると、対象に対して否定的になってケアの質が低下したり回避したい気持ちが予期せぬ事故を招くことも考えられるからである⁴⁻⁶⁾。HIV/AIDS教育の方法についてのこれまでの研究では、HIV/AIDSに関する知識が正しいほど肯定的態度を示しやすいことが明らかにされている^{4, 7, 8)}が、否定的態度を持つ者の態度の変容に対する知識教育には限界がある^{9, 10)}ともいわれており、いずれにおいても総合的な学習計画の必要性が指摘されている。しかし現状では、性感染症患者の看護が教授されることは少なく⁴⁾、またHIV/AIDSについては病理学や微生物学、疫学の一

部として触れられているに過ぎず、看護学生がHIV/AIDSケアを総合的に学習する機会は少ない。

そのため、本研究では看護学生と看護学以外を専攻する学生との比較を通して、看護学生のHIV感染者に対する見方や態度の特徴とこれを形成する要因を探索し、HIV/AIDSケアを教育する方法を検討する一助としたい。

1. 研究方法

A看護専門学校2年次生とその知人の看護学以外を専攻している学生に対し、平成7年1月に調査を実施した。

データはまず看護研究授業演習の一環として収集し、看護学生については調査票への自己記入をさせ回収を行い、その知人については学生自身に電話もしくは面接でインタビューするよう依頼し調査票へ記入させ提出させた。知人は看護学以外を専攻している学生であることを条件とした。ついでこれを研究的に活用することについて説明を行い、同意を得た者の調査票のみを分析に使用した。

調査内容は、HIV/AIDSについての知識・体験、関心や患者の見方・付き合い方などの態度、自分がAIDSになる可能性の認識、及びHIV/AIDS対策についての考え

1) 川崎市立看護短期大学

2) 聖マリアンナ医科大学看護専門学校

方であり、いずれも選択肢による回答を用意した。

分析は知識については正しさを、態度については頻度・程度の割合を算出し、それぞれの関連を統計的に分析した。統計処理には t 検定及び χ^2 乗検定を用いた。

2. 結果

(1) 対象の概要

対象は全119名で看護学生が89名、看護学以外を専攻している学生（以後、一般学生とする）が89名であった。このうち看護学生が全員女性であったため、性差による影響を除く目的で一般学生についても女性のみを分析対象とした。年齢は看護学生が平均 19.8 ± 0.7 才、一般学生が 19.7 ± 0.5 才で両群に年齢の差はみられなかった。

(2) HIV/AIDSに対する態度のありようと専攻による相違

「エイズについて関心があるか」に対しては、「関心が高い」が96名と最も多く、ついで「あまり関心はない」が21名、「あまり聞いたことがない」は2名のみであった。この関心の専攻による違いはみられなかったが、「あまり聞いたことがない」を

選択した2名はいずれも一般学生であった。

「エイズについての情報を得ようとしたことがあるか」に対しては、「学校などの講義で聞いた」者が最も多く68名であり看護学生に有意に多かった。ついで、「たまたまテレビで見た程度」が36名であり、「積極的に情報収集した」者が10名でその内9名は看護学生であった。また「エイズについてはよく知らない」を選択したのは5名であったが、全員が一般学生であった。

「友人がHIVに感染したことを知ったらどうするか」については、「これまでと同様につきあう」と回答した者が70名と最も多く、ついで「わからない」が37名であった。「感染の原因による」と回答した者は9名、「離れる」と答えたのは2名であった。「わからない」と回答した者は有意に一般学生が多かった。(図1)

「性交渉による感染者と輸血や血液製剤による感染者とでは違いがあると思うか」の問いに対しては、「どちらも同じと思う」が45名、「性交渉での感染は自業自得である」が42名であり、30名は「わからない」を選択していた。この問いに対する回答には、専攻による差はみられなかった。(図2)

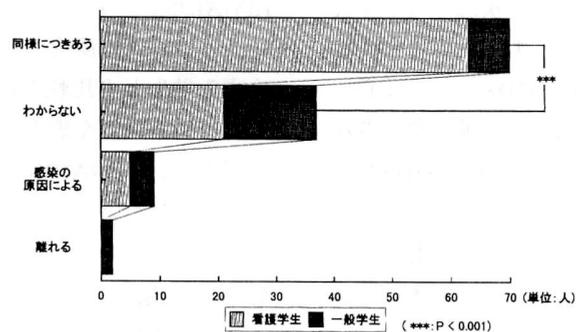


図1. 「友人がHIVに感染したことを知ったらどうするか」への回答と専攻との関係

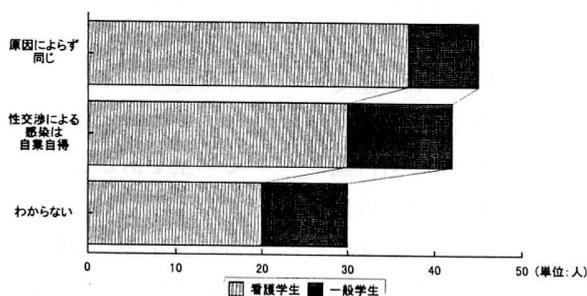


図2. 「原因により感染者に違いがあると思うか」への回答と専攻との関係

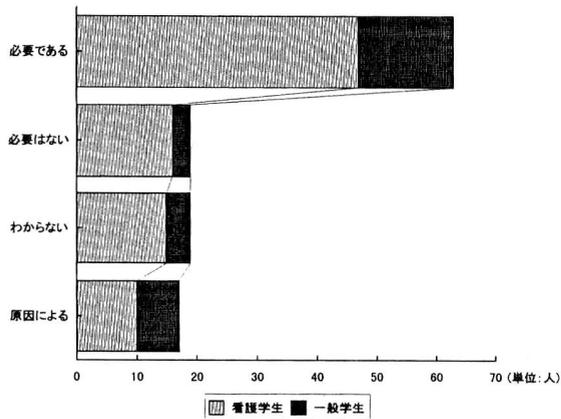


図3. 「感染者は保健所が名簿を作成して知っておくべきと思うか」への回答と専攻との関係

「自分がエイズになる可能性はあると思いますか」については、52名が“あるかもしれない”と回答しており、その他、“たぶんないと思う”が42名、“わからない”が17名、“絶対にない”が7名であった。専攻の違いでは看護学生は有意に多く“あるかもしれない”を選択していた。

「HIV感染者は保健所や厚生省が名簿を作成して知っておくべきだと思うか」に対する回答として最も多かったのが“必要である”の63名、ついで“必要はない”と“わからない”が同じ19名、“原因による”が17名であった。この回答については専攻による違いはみられなかった。(図3)

(3) 知識のありようと専攻による相違

「エイズの流行が始まったのはいつか」の問いに対し“10~15年前から”という正しい答えを選択したのは69名であり、これは有意に看護学生が多かった。

「相手がHIV感染者である場合、HIVに感染する可能性が高いもの」(図4)として、“感染者の汗に触れる”“感染者からの輸血”“一緒にプールに入る”について誤った回答をした者はみられなかった。“コンドームを用いない性交”“注射の回し打ち”について誤った回答をしたのはそれぞれ1名と2名でいずれも一般学生であった。“同じ蚊にさされる”と感染すると誤って答えた者は7名(看護3名、一般4名)、“母親が感染者の場合の母乳栄養”では感染しないと誤って答えた者は24名(看護11名、一般13名)であった。母乳栄養による感染について正しく答えた者は看護学生が有意に多かった。その他の知識には専攻による違いはみられなかった。

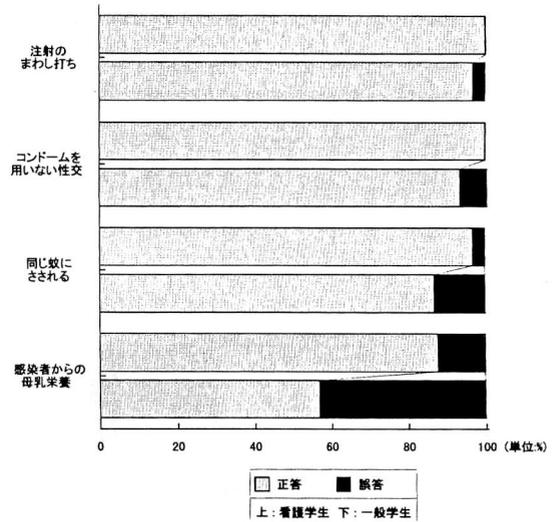


図4. 「HIVに感染する可能性が高いもの」への回答と専攻との関係

(4) HIV/AIDSに対する態度と知識の関連

態度の形成要因を探るため態度と知識との関連を分析した。

「性交渉による感染者と輸血や血液製剤による感染者とでは違いがあると思うか」という問いへの回答と知識やその他の態度との関係を見た。“性交渉での感染は自業自得である”とした者は、“どちらも同じ”と回答した者に比べて、有意に多くHIV感染者名簿の作成と保健所による管理の“必要性がある”もしくは“原因によってはある”と回答していた。(図5)

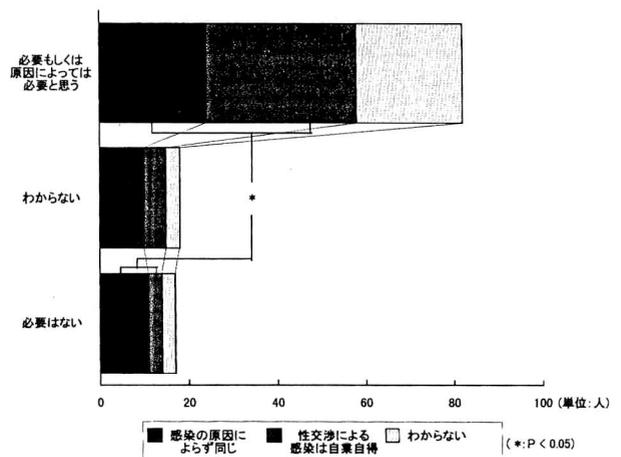


図5. 「感染者は保健所が名簿を作成して知っておくべきと思うか」と「原因により感染者に違いがあると思うか」との関係

HIVに感染した友人との付き合い方と流行時期についての知識とは関連がみられ、流行時期について誤った知識を持つ者に、有意に付き合い方は“わからない”と回答した者が多かった。(図6)

その他の態度と知識との有意な関連はみられなかった。

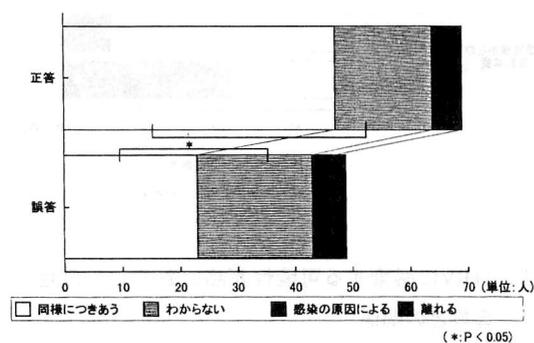


図6. 流行時期についての知識の正しさとHIVに感染した友人との付き合い方との関係

(5) 誤った知識と態度との関連

知識が誤って獲得されている場合これが態度に及ぼす影響を見るため、特に誤答者の少なかった「感染者と同じ蚊にさされると感染する」と回答した7名の他の問いへの回答を点検した。この回答者に専攻の偏りはなく、“関心は高い”を選択していた者は71% (5名)であり正答の者の83% (90名)と共に最多であった。一方、情報を“積極的に収集した”者は正答者では9名みられたが誤答者には1名もなかった。また、友人がHIVに感染した場合つきあい方を変えるかについて正答者では“わからない”と回答した者は25% (27名)であったが誤答者は全員がこう回答していた。感染の原因による患者の見方の違いについては正答者の35% (37名)が“性交渉による感染は自業自得”を選択したのに対し、誤答者では57% (4名)がこう回答し、また自分がエイズになる可能性については“たぶんない”と回答した者が正答者の32% (35名)に対し誤答者で71% (5名)であった。患者名簿の作成・管理の必要性について“そう思う”を選択した者は、正答者では52% (56名)であったが誤答者では86% (6名)であり、必要と“思わない”はいなかった。以上については人数が少なく統計的分析は実施しなかった。

4. 考察

(1) HIV感染者への態度を形成する要因

本調査対象は講義やテレビ等からHIV/AIDSについての情報を受け取り正しい知識を有していた。一方、HIV感染者への態度としては特定の回答への偏りはみられなかった。このように正しい知識を有していても様々な態度が示されたことは、知識の正誤によって示される態度が異なる^{7, 8, 14)} という他の調査結果とは矛盾するものである。これは本調査対象の多くが正しい知識を有していたことが他の調査に比べて誤った知識の影響を小さくさせ、知識の正しい者のもつ態度の多様さを前面に現した結果と考えられよう。態度のうち感染した友人との付き合い方について尋ねたのに対しても、同様に付き合う、離れる、わからないなどいずれの回答も選択されていた。感染経路についての知識が正しいにも関わらずこのような結果であったことは、態度の形成には有している知識の正しさよりも、知識を使って行動の仕方を考えることのできる知識の合理的な活用能力と知識に基づく判断を信頼する価値観が関わっていることを示しているように思われる。

一方、友人がHIVに感染したとわかったときの付き合い方は、流行時期についての知識と関連していた。流行時期を正しく記憶しているということはHIV/AIDS問題を自分との関わりだけでなくより広い視点から捕えた結果といえるであろう。このような把握のできる者はHIV/AIDS患者への非合理的な反応が招いた悲劇的な経過についても関心を持つことができているのかもしれない。こう考えれば流行時期について正しく知っている者が付き合い方を変えないという合理的態度を示しやすかった背景が理解されよう。しかし、同時に友人が感染しても付き合い方を変えないと述べたのは有意に看護学生に多かったのも、これは看護学生の特徴なのかもしれない。看護を学ぶ過程で知識の合理的活用能力を身につけた結果がここに現れているとも考えられよう。

性交渉による感染は自業自得と回答した者には、保健所や厚生省が患者の名簿を作成して知っておく必要があると述べた者が有意に多かった。自業自得という態度の前提には感染は回避することができたはずという認識が存在していると思われる。しかし、実際には頭でわかっているにもかかわらず予防行動がとれない場合や感染を回避することが容易でない状況もあるということは、これまでの調査や取材記録^{10, 16, 17)}

から明らかである。本調査の結果は、感染経路について情報を提供する場合同時に予防は可能であることは伝えられるが^{10, 15)}、知識を行動化する際の困難についてはあまり強調されない現状を反映しているのかもしれない。自業自得という判断はこの困難さが認識できていない場合になされやすいと思われる。一方、患者名簿の作成は、患者の人権保護を第一と考えるため実際には行われていない対策である。現在実施されている社会対策についてどの程度知っているか、また名簿を何に使用するかを問うていないため回答の意図は不明である。が、名簿作成が必要と述べた者は援助対策のメリットのみを考慮し、方法によっては患者の人権を侵害しさらには社会的不利益につながる可能性すらあるということ認識してはいないように思われる。これは言い換えればケア側からの視点のみで対策を理解し、患者側からは捕らえられていないといえるであろう。このように自業自得という態度と名簿作成の必要性の認識との形成要因には共に多様な事情への配慮に欠けた一面的なHIV/AIDSの捕え方があると思われる。

(2) HIV/AIDSについての誤った知識の影響

本調査対象は、その受け身的な情報収集態度にもかかわらず、他の調査^{7, 11, 14, 18)}に比較して正確な知識を有していた。これはAIDSキャンペーンや情報番組などからHIV/AIDSについての情報が流入しやすい現状を反映していると思われる。このように正しい知識を持ちやすい環境にあるにもかかわらず誤った知識を有していた者の特徴を明らかにすることは、態度に及ぼす知識の影響の検討に役立つと考える。

感染経路についての知識の中で、わずかに7名の者が同じ蚊にさされると感染すると誤った回答をしていた。この全員が友人がHIVに感染したら付き合い方をどうするかはわからないと回答しており、また、保健所による名簿の作成が不必要と思う者がいなかった。これは、対象に誤った知識を持った者も多く含まれていたこれまでの調査で示された知識の誤まりと否定的な態度とが関連していたという結果と一致している。蚊が感染を媒介するならば身近な人が感染したら自分も感染する可能性が高くなるため近づきたくないと考えるのは当然の回答と思われるが、蚊にさされると感染すると述べた者は、一方で自分がHIV/AIDSになる可能性はたぶんないと回答しており、論理的に矛盾した認識の存在が示唆され

る。対象数が限られたため統計的分析は実施していないが、このように正しく知っている者が多い知識について誤っている者には合理的でない判断をする傾向があるのかもしれない。このことから、態度に影響を及ぼしたのは、知識が誤っていることよりも合理的でない判断をすることであるように思われる。

(3) 看護学生の特徴と看護教育におけるHIV/AIDSケア教育のあり方

看護学生は、感染した友人との付き合い方において知識を合理的に活用する能力を身につけていると考えられた。一方、性交渉による感染は自業自得と回答した者は少なくなく、一般学生との相違がみられなかった。自業自得という態度は感染が回避できるという前提にたてば知識を合理的に活用した結果の判断ともいえ、前述の結果と矛盾するものではない。しかし、同時に自業自得というのは既にいかんともしようのない過去の経緯を追求する突き放した態度でもあり、患者を支援し共生していこうとするものとは異なるといえよう。自業自得と回答した看護学生は、その合理的思考能力で自らの中にあるHIV/AIDSへの否定的感情を容認していることも考えられる。合理的思考能力が支援の態度の形成に貢献するには、まず、この否定的感情が解決されることが必要なのではないだろうか。この際、看護学生が一般的に患者個々の事情を重視して支援の態度でケアに臨むよう教育されていることを考えると、看護学生が自らのもつ否定的感情を受け入れることは容易なことではないと思われる。自業自得という見方の背景にHIV/AIDS問題の一面的な捕え方の存在が示唆されたこと、またいわゆる“エイズ自業自得論”は実際にHIV感染者のケアに携わると意味のないものと感じられると言われている^{4, 5, 12, 13)}ことから、学生自身がHIV/AIDS感染者と感染者への援助方法とを多面的にまた個別な事情を汲んで考え体験することができるような機会と教材の提供が有効であるのかもしれない。また、HIV/AIDSケア先進国ともいえる米国では、スタッフが自らの否定的感情を解決しHIV/AIDS患者を受容するため、心理専門家とともに自分の気持ちを露出しこれと徹底して対決するディスカッションが行われている³⁾。基礎教育の中では必ずしも可能ではないかもしれないが、このような機会も検討される必要があるだろう。

おわりに

HIV/AIDSはいろいろな問題を浮き彫りにする病
気である³⁾といわれている。HIV/AIDSについて考
える機会を提供することは、HIV/AIDSや感染者へ
の態度やケアへの絶対的信頼感を今一度点検し、患

者の個別性を真に考え、疾病ではなく疾病をもった
個人として患者を支援していく看護専門家としての
態度を養っていく絶好の機会であるとも考えられ
る。HIV/AIDSケアについての総合的な教育方法を
検討していきたい。

引用文献

- 1) 国立国際医療情報センター/AIDS医療情報室. AIDS情報ファイル. 日本医事新報 No3731, 1995.
- 2) 桜井賢樹. 世界のエイズ/HIV感染の動向. エイズと教育. 現代のエスプリ 316:26-33, 1993.
- 3) 井上悦子. エイズ患者の看護—米国におけるエイズ患者看護の経験から. 教育と医学 1(7):653-659, 1993.
- 4) 久保寺寿美. エイズと看護—看護婦の役割と対応について. 看護実践の科学 37-42, 1993.8月号
- 5) 木村真知子. HIV感染者の看護の実際. 看護実践の科学 43-48, 1993.8月号
- 6) 久保寺寿美. AIDS看護の現場. 看護実践の科学 70-72, 1993.1月号
- 7) 岡田耕輔他. 看護学生の持つHIV/AIDSに関する知識と意識・態度との関連. 日本公衆衛生雑誌 41(6):538-548, 1994.
- 8) 宗像恒次. エイズ・サバイバル. 日本評論社 1992.
- 9) Solnim Nevo V, Ozawa MN, Auslander WF. Knowledge attitude and behaviors related to AIDS among youth in residential centers: results from an exploratory study. J adolesc 14(1):17-33, 1991.
- 10) 武田敏. 知識だけに終わらないエイズ教育. 教育と医学 41(7):668-673, 1993.
- 11) 水谷成子他. 看護者のエイズに対する知識および認識度調査. 日本看護科学会誌, 12(3):82-83, 1992.
- 12) 池田恵理子. エイズと生きる時代. 岩波書店 1993.
- 13) 池上千寿子. 教育が最良のワクチンという証—アメリカの差別偏見への闘いに学ぶ. エイズと教育. 現代のエスプリ 316:205-213, 1993.
- 14) 吉岡一実他. エイズ教育の効果に関する研究—視聴覚教材を用いて. 三重大学医療技術短期大学部紀要 2:55-62, 1993.
- 15) 厚生省保健医療局エイズ結核感染症課監修. HIVとカウンセリング. 日本公衆衛生協会. 1993.
- 16) 家田莊子. 私を抱いてそしてキスして—エイズ患者と過ごした一年の壮絶記録. 89, 文芸春秋, 1990.
- 17) 宗像恒次, 田島和雄. エイズとセックスリポート/JAPAN. 85, 日本評論社, 1992.
- 18) 磯部純一. 徳島県のナースを対象としたエイズ・アンケート調査について. 厚生省平成2年度HIV感染者発生予防・治療に関する研究班研究報告書 349-353, 1991.

Abstract : Knowledge about the HIV/ AIDS of the 89 nursing students and the 30 other majors and attitude were investigated to get the foundation information for the education of the HIV/ AIDS-care to the nursing student was examined.

Though both students had proper knowledge about infection route of HIV, nursing students did proper answer statistical significantly about explosion time of HIV. The attitude which a patient was distinguished from by the cause of the infection was seen in both groups and significantly relation with the recognition of the need that a patient list is made by the public health office was shown. Who knew explosion time and the nursing students stated associating wasn't changed if they knew their friend has HIV. Other relation among attitudes and knowledge weren't shown.

It was guessed that it related to the attitude whether to catch HIV/ AIDS issues variously, to recognize the situation of infection one by one, and to consider it rationally. The need of the intention education to develop a supportive attitude to the HIV/ AIDS patient toward the nursing student was suggested.